

防弾チョッキもあるでよ——“製衣禦弾”

内田慶市

19世紀末の上海には実に色んな「新生事物」が登場してくる。『或問』第12号の表紙絵の「テーマパーク」もそうだが、今回の表紙絵で取り上げた「防弾チョッキ」も世界の最先端をいく事象を紹介したものである。

この時代、欧米では銃器の開発が進み、たとえば1876年にアメリカ建国100年を記念してフィラデルフィアで開かれた万国博覧会を見聞した李圭の『環遊地球新録』では、「加托乃」銃、すなわちガトリング銃が紹介されたりしている。

さて、表紙絵の「防弾チョッキ」は『點石齋畫報』に掲載されたものであるが、以下のように説明がされている。このような欧米の新式軍事技術を紹介しながら中国は江南製造局を中心に近代国家への道を模索していったのである。

彈丸脫手，著物必穿，此軍中利器也。邇來槍炮盛行，鉛彈之用尤廣。每見西人出獵，偶一不慎，彈子橫飛，往往肇禍，心竊傷之。蓋彈能破堅而入，苦無抵禦之法也久矣。乃澳京竟有縫工阿都獨出心裁，創成禦彈之物。其物製如衣服，可黏於戎衣之上，重不過數磅。取槍轟之，彈丸迸出，著物即散。有人不信，試以木偶身穿戎服，外加此物，離二百蔑打或四百蔑打，遙以槍中之彈擊之，丸不能入。按一蔑打約英里三尺三，二百蔑打已不為近，若四百蔑打遠更倍之矣。說者謂槍彈擊物無堅不破，今以此物禦之，竟不能穿孔而過，是何堅利乃爾。如以之製造別物，雖處槍林炮雨中，當亦無難捍衛，豈止能禦彈丸而已哉。果爾，則軍營中又添一利器，何幸如之，（『點石齋畫報』革二，1893）

弾丸は発射されると必ず衣服を必ず突き抜くもので、まさに軍隊における利器といえる。このかた銃器はますます隆盛を極め、鉛弾の用途はますます広がってきている。ところで、西洋人は狩りに出かける時など、ときたま不注意から流れ弾に当たるといふ事故にしばしば出くわすことがあり、心密かにこれを嘆いているところであるという。それは弾丸は堅いものでも撃ち破ってしまうものであり、困った

ことではあるが長くそれを防ぐすべがなかったことによる。しかるに、オーストラリアの一裁縫師により考案された防弾チョッキが創り出された。これは衣服を作るように、軍服の上に貼り付けることができ、重さも数ポンドに過ぎないものである。銃で撃っても弾丸は散らばり、その衣服が飛び散るだけである。信じない人がいるならば、試しに人形に軍服を着させ、その上にこれを付けて、200メートルあるいは400メートルぐらい離れたところからこれに命中させてみればよい。弾の中には入らないのである。1メートルはヤード法で換算すれば3.3フィートであるが、200メートルとなればすでに近いとは言えないし、まして400メートルとなればその倍となる。弾丸が打ち破ることが出来ない堅いものはないというが、今、これで防げば穴を開けることすらできないのであり、何という堅さであろうか。もしこれが別のものに应用されれば、弾丸雨飛の激戦の中にあっても、それを防ぐのは容易であり、ただ単に弾を防ぐというだけではないのである。まさにそうであれば、軍隊にまた新たな利器が加えられたということであり、なんたる朗報であろうか。

〔訳注〕

阿都：防弾チョッキを考案した人の人名の音訳であるが、欧文名は不明

蔑打：メートルの音訳

英里：一般的には「ヤード」と訳されるが、ここでは1メートルについて述べられており、「ヤード法」を指すと考えるべきである。すなわち、1メートルはヤード法では約3.3フィートとなり、この文の内容に符合する。